第五十五回 出雲蓉の会

令和六年五月十九日（日）

午後二時開演（午後一時十五分開場）

「組打」の涙

山川　静夫

歌舞伎の『一谷嫩軍記』の〝須磨浦組打〟の場は、熊谷次郎直実が主君義経の心を察して、敵方の若武者敦盛を助けるため、自分の一子小次郎を身替りとして首を打つ悲劇だ。

熊谷の葛藤や、小次郎の悲しみが切々と伝わる名場面だが、小次郎は敦盛で、敦盛は小次郎なのだから、演ずる役者はまことに難しい。これまでに沢山の「組打」を見たが、いつも感動の涙に誘われる。

今回は、もう一つ加えての〝組打の涙〟がある。

三年前になるが六世澤村田之助丈の逝去だ。田之助さんは時代物・世話物を問わず通用する芸域の広い役者で、自然体の演技に定評があった。

人柄も無類の人間国宝だった。

出雲蓉さんは、田之助さんを師と仰ぎ、常に指導を受けていた。中でも思い出深いのが「組打」で、平成八年の初演以来四回も演じている。

田之助さんは、出雲さんについて「蓉さんの舞踊人生は、稔りの季節を迎えているようだ」と語っていた。

竹本義太夫の教えに「師匠は口傳に在り、稽古は花鳥風月に在り」とあるが、〝田之助三回忌追善〟と銘打って出雲さんが「組打」を演ずるには、この言葉がふさわし。

おそらく、田之助さんの口傳を存分にふまえて稽古を重ねたに違いない。

「組打」を観るたびに感動する私だから、今回は出雲さんが大切な師匠を失った悲しみの涙と合わせて拝見したい。

もう一曲の『古道成寺』は、出雲さんが〝終生のテーマ〟として試行錯誤を繰り返し演じてきている。

その全力投球にも、もちろん期待している。（エッセイスト）

『古道成寺』に寄せて

道成寺院主　小野　俊成

道成寺物を演じることは、仏様に御経を上げるのと同じ功徳がある。

道成寺物を拝見するだけで、仏様に手を合わせるのと同じ功徳がある。

この公演で大勢の方々に古典芸能の素晴らしさを広めると共に、観客と仏様との橋渡し役を勤めるのだから、必ずや仏様が舞台を護って下さる。

道成寺物の公演を控え、成功祈願に訪れる舞台芸術家の方々にお伝えしている言葉である。

『古道成寺』に新たな生命力を吹き込んで下さった出雲蓉さんには、大きな功徳と神仏の御加護があるだろう。

五年ほど前、何人かの方から出雲さんの『古道成寺』の高い評価を伺った。

聞こえて来たのが日本舞踊の方だけでなく、能楽の評論家だったり、オペラの関係者だったり、全く違う分野の方々が異口同音に褒め称えるのが印象的だったのを覚えている。

その出雲さんを、令和四年に道成寺にお招きし、境内の舞台で「古道成寺」を舞って頂けたのは本当に有り難いことだった。

しばらくして舞踊批評家協会賞も受賞なさったとお伺いした。

道成寺物は決しておめでたい曲では無いのだが、多くの舞台芸術家がその舞台人生の節目になったと仰って下さる不思議な曲でもある。

五十五回を重ねる「出雲蓉の会」で再演する『古道成寺』を、出雲さんは更なる飛躍の節目になさるのだろう。

山寺から御成功を祈りつつ　合掌

演出　田中　英機
音響　高橋　嘉市
照明　高木とうみょう
舞監　末永　明彦
映像　桜井　翔平
写真　高城　有香

会場　国立能楽堂
〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷4-18-1
HP:https://www.ntj.jac.go.jp/nou.html

主催　出雲蓉の会
〒167-0042 杉並区西荻北3-14-7
HP:http://www.jiuta-maimu.jp

亡き師に捧ぐ

出雲蓉

澤村田之助先生との稽古（2010年）

澤村田之助・山川静夫氏対談（2012.11.24 国立小劇場「第44回出雲蓉の会」）

薫風さわやかな日曜日の昼下がり、ご来場いただきました皆さまに、先ずは心より御礼申し上げます。早いもので、いつの間にかこの会も、五十五回という回数を重ねて本日と相なりました。

地唄舞の恩師・神崎ひで先生ご逝去のとき、私はまだ三十代の半ばでした。他流についてを求めるのではなく、何とかひで先生伝授の舞を深めていく方法はないものか――思いあぐねた末、学生時代から存じ上げていた澤村田之助師にお願いして、舞に心を入れていただくことを思い立ちました。

舞の稽古とは、長い年月をかけて振りの技術を磨いていく中で、やっと舞の情念や思いに辿りつくという、気の遠くなるような修行です。それでも、歌舞伎の女形が真の女心を追究して、観客の目に晒されながら日々体得していく芸に比べれば、きめの細かさも情感も、女が女であるが故に手ぬるいと思ったからです。

以来四十数年間、田之助師のお仕事の合い間や私の会の演目のために、ずっとご指導を受け続けてまいりました。「雪」や「ぐち」の女心の機微や、「八島」「江戸土産」などの型の決まった所作……中でも思い出深いものは、年月だけではどうにもならないことも思い知らされました。

その田之助先生も、お亡くなりになられてからすでに三年になります。先生に仕込んでいただいた芸の懐の深さが、まだ少しでも私の体の中に残っておりますことを、日々祈りながら稽古を重ねてまいりました。

もう一曲の「古道成寺」の方も、私のライフワークとして、特に紀州道成寺での公演以降、振り付けをほじめ全てを細かく手直し致しました。

お目まだるいことは存じますが、最後までご高覧の上、厳しいご批評を賜りますよう、お願い申し上げます。

最後に、特別ご出演を賜りました野村万作先生をはじめ、皆さまに厚く御礼を申し上げ、ご協力いただきました全ての方々に、心より感謝申し上げます。